

重点取組分野	元 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
豊かな心	①教室配置をたてわり配置にすることで、行事でのたてわり活動だけでなく、掃除、給食、学習、休み時間等日常生活の中でたてわり活動の幅を広げる。②自分や相手のよさを認め、互いを思い合いもにかかわることを楽しめる子どもの育成を通して、本校の「やさしい心の育成」の充実をめざす。	①日常的に掃除を行ったり、日常的に会話をしたり遊んだり、たてわり活動としてのかかわりを越えたかかわりを行うことができた。②年齢が違いうちと関わることで話し方を変えたり、注意の仕方を変えたりなど、相手を思いやった行動を見ることが日常的に見ることができるようになった。	A
確かな学力	①学年研や重点研等で子どもの学習状況が話題になる内容にし、自己有用感を高めることのできる授業づくりを行い、楽しく、わかる授業を目指し、授業の工夫、改善に努める。②生活科・総合と教科等の連携を密にする。③生活科・総合と教科等の連携を密にする。④生活科・総合と教科等の連携を密にする。⑤生活科・総合と教科等の連携を密にする。	①行事や日常の児童指導が優先されていて、学年研や重点研などで、教材研究をし、楽しく分かる授業などを狙うことができなかった。②重点研では、様々な思考ツールを取り入れ、体験的・問題解決的な学習、話し合い活動を行った。さらに主体的・協働的に学んで高め合う姿を引き出していきたい。	B
特別支援教育	①児童支援専任や特別支援コーディネーターを中心として学校・保護者・地域・幼・保・小・中、専門機関等と連携を密にすることで、特別支援教育の充実を図る。②学年研をできるだけ子どもが話題になるように努め、職員会議等で個々の児童の情報を共有し全職員で支援する。	①学校・保護者・地域・幼・保・小・中、専門機関等とケース会議等の機会を設けたり、面談前に事前連絡を密にしたりすることで、特別支援教育への連携を図ることができた。②児童指導協議会やコンサルテーション、いじめアンケート等を通して、学年間だけでなく、学校として情報を共有できた。	A
児童生徒指導	①廊下や階段を安全に歩く、進んで挨拶をする。人の話をしっかり聴く等、全教職員が同じ意識で指導をし、やさしい心の具現化を図る。②児童指導の充実を図るため、指導内容を全職員で共通理解し、チームで指導にあたる。	①全教職員が同じ意識をもち、同じように指導できるよう年度当初に情報を共有する等してきた。学校のきまりを子ども達も知っている。しかし、廊下の歩き方など守れなかった。②教員だけでなく、家庭も巻き込んで同じように指導、支援していく必要があると感じた。	B
健やかな体	①体力向上の一環として、毎週水曜日の朝の時間に、マラソンや縄跳び等の体を動かす活動に取り組む。②体力テストの結果等を保護者と共有するなど、家庭や地域と連携して体力の向上を図る。また、早寝・早起き・朝ご飯等の基本的な生活習慣の改善を呼びかける。	①朝の時間を活用して継続的に体力アップに取り組んだ。来年度は、種目を絞って回数を増やすことで体力向上につなげていきたい。投擲運動は、運動量の確保が難しいので、普段の授業の中で取り扱うこととする。②体力テストのデータを保護者に配布することで、子どもの実態を共有することができた。	B
地域連携	①学校運営協議会で、学校から教育活動の情報を提供し、地域、保護者、学識経験者の意見を踏まえて学校づくりができるようにする。②生活科や総合的な学習の時間、社会科、青木のまちの風総会、地域防災訓練などを通して、地域の人々や社会と関わり合う活動を積極的に進めたい。	①学校運営協議会では、青木のまちの風総会のねらいや内容について参考者の意見を踏まえて改善を図ったり、働き方改革について理解をいただいたりして学校づくりにつなげてきた。②心の教育を中心とした本校の教育を地域と連携しながら推進していきたい。	A
コミュニケーション	①高学年のオーストラリア交流、中学年のケニア交流の中で、実際自分が書いた手紙や自分の言葉でコミュニケーションが成立する臨場感を味わう。②言葉だけでなく、相手に気持ちを伝える大切さやその方法を外国語活動だけでなく日常生活で取り組んでいく。	①相手は何を知りたいのか、自分は何を伝えたいのか。相手がいて初めてコミュニケーションは成立する。相手の国や相手の学校を知る機会を設けることで相手のもっと知りたがり気持ちを高めることができ、コミュニケーション力へとつながっていった。②日常の場でも相手を意識した活動は継続が必要。	B
情報教育	①教科横断的に教師、児童ともにタブレットやPCを活用し、情報をより正確に伝えたり整理したりすることができるようにする。②大原学園でのプログラミング教育をもとに、ICT機器を扱いながら、プログラミング的思考(論理的思考力)を育成する。	①国語科の学習でプレゼンテーションソフトを使ったり、体育でタブレットを使い課題解決学習に取り組んだりするなどの実践を行った学年があった。しかし、学年やクラスによって、ICT機器に触れる回数は著しく差がある。②プログラミング学習の初歩的な内容を、大原学園の学生と楽しく学ぶことができた。	C
いじめへの対応	①「子どもの社会的スキル横浜プログラム」を活用し、だれも安心して参加でき、自尊感情を高める授業づくり・集団づくりを進める。②いじめは起こるものだという意識をもち、全職員が「青木小学校いじめ防止基本方針」を基にした指導、対応を日頃から行うことで、いじめの早期発見に努める。	①YPを通して友達と関わることの楽しさ、自分を知ってもらう、相手を知るよさを少しずつ積み重ねている。優しい心を育てるよう引き続き、支援していく。②いじめは起こるものだという意識をもち、全職員が「青木小学校いじめ防止基本方針」を基にした指導、対応を日頃から行うことで、いじめの早期発見に努める。	A
人材育成・組織運営(働き方改革)	①教員が指導力向上のために、授業の見合いの時間を設け、メンターチームが自分のクラスを開けたときにも安心して補う。②プリント類の印刷や配付物の仕分けなど、内容の優先順位を考えながら、職員室アシスタントに作業を依頼し、副校長や教員が児童支援に専念できるようにする。	①教員数が減る中で、補欠体制を整えるまでには至らなかったが、教育実習生や初任者向けに行う示範授業に、多くの教員が授業を見に行き、学び取るうとしていた。②職員室アシスタントに作業を依頼することで、負担軽減が進められているので、さらに児童支援や指導力向上の取組の動きを活性化させたい。	B
ブロック内評価後の気付き	ブロック内で、「目指す子ども像」を共有できたことにより、情報交換会では同じ視点で子どもの姿について話し合うことができた。また、担当教科を中心にグループを構成して協議を行うことで、中・小9年間を見通した学びの深まりについても共通認識を図ることができた。教務主任会では、各行事に向けての打合せに加えて、新学習指導要領実施に向けての情報共有を行い、カリキュラム作成についても情報交換を行った。配慮や支援が必要な生徒に対して個に応じた支援をしていくために、小学校の児童の情報を確実に中学校に申し送りできるようにしたい。	今年度はコロナ対策で、会議や授業参観、児童生徒の交流ができなかった。しかし、中学校の生徒会が小学6年生向けに中学校を紹介する動画を作成し、各小学校で視聴することができた。各小学校では、中学校のイメージをもつ機会がつかれ、中学生の自分を考える自分づくり教育へとつながった。来年度は中学校が新学習指導要領完全実施となるので、集まった会議での意見交換が難しい場合は、各校の成果や課題を小中一貫担当者を通して意見交換をするなど、代替の方法を検討し、小中一貫教育を推進しながら各校の職員とカリキュラム・マネジメントできるようにしたい。	今年度は、学校運営協議会開催が難しくかったため、学校の現状を書面でお伝えした。コロナ収束後、開催を予定している。
学校関係者評価	今年度より重点取組分野に入った情報教育、働き方改革の話題になった。iPadについては、子どもに1台ずつの配当になる予定がないこと、教職員の経験の差があること、研修などで経験を積むことを確認した。働き方改革として、「ミライム」を導入し、パソコンを介して効率化するよさがある一方で、子どものことや教材のことを面と向かってやりとりすることが減る心配をご指摘いただいた。打合せの時間を短縮し、教材研究の時間を確保することができるメリットをあげ、学校の業務軽減に地域としても理解をしていきたいのご意見をいただいた。		

重点取組分野	2 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
豊かな心	①教室配置をたてわり配置に設定、学校づくりに携わるPJ活動、奉仕活動(掃除)など日常生活の中で、たてわり活動の幅を広げる。②あいさつ、廊下の歩行などの取組を通して、自己有用感を高め、自他を大切にできる子どもの育成、そして本校の「やさしい心の育成」の充実をめざす。	①感染症対策の影響もあり、たてわり活動はたてわり掃除と休み時間の遊びを数回行うのみとなっていました。②同じ感染症対策の影響もあり、例年行っていたあいさつ運動や廊下見守り隊などの活動は行うことができなかった。	B
確かな学力	①学年主任会で、学年研での教材研究、授業改善の振り返りを実施を確認したり、授業改善の振り返り方を共有したりする。②一人ひとりのよさを生かし、高め合う授業を目指すために、体験的・問題解決的な学習を多く取り入れたり、一人ひとりの学び方や資質・能力を評価したりする。	①学年主任会で、カリキュラムの運用を確認したり、プログラミング教育の進捗状況を共有したりすることができた。②評価したことを指導に生かしたり、板書を中心に子どもの思考過程を整理したりすることができた。新課程の学習評価の考え方の浸透が課題である。	B
特別支援教育	①児童支援専任や特別支援コーディネーターを中心として学校・保護者・地域・幼・保・小・中、専門機関等と連携を密にすることで、特別支援教育の充実を図る。②5組を6・7・8組に分けることや校内委員会・児童支援専任を中心とした取り出し教育を行い、子ども一人ひとりに合った支援の充実を図る。	①専門機関等に子どもや環境を実際に見てもらうことで、よりよい指導・支援のための手立てを教えてもらった。またその支援を通して特別支援教育の充実を図ることができた。②知的・情緒的に分けることや取り出し教育を行うことで、より一人ひとりに合った支援ができ、子ども自身の自己肯定感に繋がった。	A
児童生徒指導	①掃除の大切さを知り、奉仕の心を育む、廊下や階段を安全に歩く、進んで挨拶をする、人の話をしっかり聴く等、全教職員が同じ意識で指導をし、やさしい心の具現化を図る。②年度当初、学校生活のきまりを音読の宿題にする等、学校と家庭で情報を共有しながら指導・支援にあたる。	①学校のスタンダードを職員で確認し、自信をもって指導にあたることのできるようにした。内容については、感染症対策上、現状維持が一杯であった。②学校のきまりに目を通したり、音読で声に出したりする回数を増やすことで、児童だけでなく保護者にも意識付けを図った。	B
健やかな体	①体力向上の一環として、毎週水曜日の朝の時間に活用し、マラソンや長縄跳びなど継続的に体を動かせるように取り組む。②体力テストの結果等を保護者と共有するなど、家庭や地域と連携して、体力の向上を図る。また、早寝・早起き・朝ご飯等の基本的な生活習慣の改善を呼びかける。	①感染症対策もあり予定していた体育的活動が出来なかった。密を避けるために短縄を中心に活動に取り組んだ。外出や激しい運動が制限されているため、児童の体力低下が見られた。②休校のころから生活リズムが崩れている児童も見られた。今年度は健康面では厳しい一年だった。	B
地域連携	①学校運営協議会で、学校長が示す学校経営方針を共有しながら、地域の意見を踏まえたカリキュラム・マネジメントを行う。②生活科や総合的な学習の時間、社会科、青木のまちの風総会、地域防災訓練、地域の人々や社会と関わり合う活動を積極的に進めたい。	①学校運営協議会では、学校長が示した方針について支持する意見が出され、地域と一体となってカリキュラム・マネジメントを行うことができた。②コロナ禍で、地域や社会と関わり合う活動を積極的に進めたいが困難だったので、連携のあり方を検討していきたい。	B
コミュニケーション	①中学生のオーストラリア交流の中で、実際自分が書いた手紙や自分の言葉でコミュニケーションが成立する臨場感を味わう。②言葉だけでなく、相手に気持ちを伝える大切さやその方法を外国語活動だけでなく日常生活で取り組んでいく。	①自分たちで考えた言葉(英語)で伝え、相手から返事が来ることでさらに意欲的に楽しんで活動ができた。②外国語、道徳、たてわり活動を通して「伝えたい」「分り合いたい」気持ちを大切に、言葉や態度などのコミュニケーション能力を高めていった。	A
情報教育	①教科横断的に教師、児童ともにタブレットやPCを活用し、情報をより正確に伝えたり整理したりすることができるようにする。カリキュラムをもとに、すべての教員がICT機器を積極的に活用する。②大原学園でのプログラミング教育をもとに、ICT機器を扱いながら、プログラミング的思考(論理的思考力)を育成する。	①生活科や総合的な学習の時間などで、教師だけでなく、児童自身もタブレットを活用し、学習に望んでいるクラスが多かった。②感染症対策の結果、今年度は実施できなかったが、理科や算数でプログラミングを取り入れた学習を行った。	B
いじめへの対応	①「子どもの社会的スキル横浜プログラム」を活用し、だれも安心して参加でき、自尊感情を高める授業づくり・集団づくりを進める。②いじめは起こるものだという意識をもち、全職員が「青木小学校いじめ防止基本方針」を基にした指導、対応を日頃から行うことで、いじめの早期発見に努める。	①YPを通して友達と関わることの楽しさや自分、相手を知るよさを少しずつ積み重ねていく。優しい心を育てるよう引き続き支援していく。②いじめに対する意識を高くもって対応することで昨年度よりいじめがより多く、早期に把握し、対応できていた。未然防止のためにYPの活用を今後も続けていく。	A
人材育成・組織運営(働き方改革)	①教員が指導力向上のために、授業の見合いの時間を設け、メンターチームが自分のクラスを開けたときにも安心して補う。②プリント類の印刷や配付物の仕分けなど、内容の優先順位を考えながら、職員室アシスタントに作業を依頼し、副校長や教員が児童支援に専念できるようにする。	①フロア研の時間を確保することで、異学年の担任で協力しながら指導にあたることができた。メンター研を支援する体制はできたので、メンターが自律的な学びができるようになるステップに移行したい。②職員室アシスタントとの連携によって、業務改善が進んでいる。さらに業務改善を図りたい。	A
ブロック内評価後の気付き	今年度はコロナ対策で、会議や授業参観、児童生徒の交流ができなかった。しかし、中学校の生徒会が小学6年生向けに中学校を紹介する動画を作成し、各小学校で視聴することができた。各小学校では、中学校のイメージをもつ機会がつかれ、中学生の自分を考える自分づくり教育へとつながった。来年度は中学校が新学習指導要領完全実施となるので、集まった会議での意見交換が難しい場合は、各校の成果や課題を小中一貫担当者を通して意見交換をするなど、代替の方法を検討し、小中一貫教育を推進しながら各校の職員とカリキュラム・マネジメントできるようにしたい。	今年度は、学校運営協議会開催が難しくかったため、学校の現状を書面でお伝えした。コロナ収束後、開催を予定している。	
学校関係者評価	GIGAスクール導入により、一人一台タブレット端末を用いた共有的な学習スタイルができるようになったのは、大きい。しかし、家にタブレットを持ち帰ると、遊び道具になっている心配もある。基本的に子どもたちに使用できるアプリには規制がかかっているが、規制がかからないものもある。情報モラルについては、今後指導の課題となってくるだろう。タブレットの導入や感染症によって、人と人との関係が希薄になりがちである。しかし、総括すると3年前に比べ、今年度の方がよくなっている。よかったという意見をいただいた。		

重点取組分野	3 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
豊かな心	①教室配置をたてわり配置に設定、感染症対策を踏まえた学校づくりに携わるPJ活動、奉仕活動(掃除)など日常生活の中で、たてわり活動の幅を広げる。②感染症対策を踏まえた上で、あいさつ、廊下の歩行などの取組を通して、自己有用感を高め、自他を大切にできる子どもの育成、そして本校の「やさしい心の育成」の充実をめざす。	①感染症予防のため限られた活動の中でも交流する相手や全校への子どもへの思いを具現化するために行うことができる工夫しながら取り組めるよう支援を心掛けた。②あいさつや廊下歩行について児童会で取り上げていく予定だったが、実行できず、来年度は計画にいれることになった。	B
確かな学力	①学年研究会の時間を確保し、各学年で年間指導計画表に重点をかける単元を明記したり、学力向上の手立てを書きこんだりしてカリキュラム・マネジメントを行う。②一人ひとりのよさを生かし、高め合う授業を目指すために、学習評価を充実させ、授業改善を図る。	①1月1回の学年研で、各教科での有効だった指導方法や、教科横断的に取り組める学習について話し合い、カリマナ表に書き込み、蓄積することができた。②学習評価について校内研修を行い、職員で共通理解することができた。今後は学年研のカリマナタイムで評価のことを話し合う機会をつくっていく。	B
特別支援教育	①校内委員会を中心として学校・保護者・地域・幼・保・小・中、専門機関等と連携を密にすることで、特別支援教育の充実を図る。②フロア研で子どもの情報を把握するなど、日頃から教員誰もが子どもたち一人ひとりに合った支援ができるよう個別的指導・教育支援計画を活用し、よりよい特別支援教育の充実を図る。	①昨年度同様、専門機関等に子どもや環境を実際に見てもらい、よりよい指導・支援のための手立てを教えてもらった。またその支援を通して特別支援教育の充実を図ることができた。②児童指導協議会後等に情報をフロアで共有することができた。個別的指導計画・教育支援計画の外部との活用方法の共有が課題である。	A
児童生徒指導	①掃除の大切さを知り、奉仕の心を育む、廊下や階段を安全に歩く、進んで挨拶をする、人の話をしっかり聴く等、全教職員が同じ意識で指導をし、やさしい心の具現化を図る。②年度当初だけでなく、長期休暇明けにも、学校生活のきまりを音読の宿題にする等、学校と家庭で情報を共有しながら指導・支援にあたる。	①学校保健委員会でもそうじについて取り上げ、各クラスで清掃の大切さを実感し、実践することができた。しかし、あいさつや廊下歩行については課題が残る。②学校のきまりだけでなく、iPadの使用法なども学校全体で音読に取り組み、学校と家庭で情報を共有した。	B
健やかな体	①感染症対策を講じた上で体力アップに取り組む。個人で取り組める短縄やラジオ体操など体力アップに取り組んだ。外出や激しい運動が制限されているため、児童の体力低下が見られた。②休校のころから生活リズムが崩れている児童も見られた。今年度は健康面では厳しい一年だった。	①感染症対策の変更もあり予定していた体育的活動が出来なかった。ラジオ体操など体力アップに取り組んだ。外出や激しい運動が制限されているため、児童の体力低下が見られた。②休校のころから生活リズムが崩れている児童も見られた。今年度は健康面では厳しい一年だった。	B
地域連携	①学校運営協議会で学校経営方針を共有したり、地域の意見を踏まえたりしながら社会に開かれた教育課程をつくる。②生活科や総合的な学習の時間、社会科、行事などで、コロナ禍の中でも地域の人々や社会と関わり合うことができる活動方法を検討し、工夫して行う。	①学校運営協議会では、地域と学校がつながっていくことを大切にしていることを確認することができ、地域社会に開かれた教育課程を創造することができた。②特に総合的な学習の時間では、感染症対策を講じながら地域の人々や社会と関わり合う活動を意図的・計画的に実施することができた。	B
コミュニケーション	①オーストラリアとの直接的なコミュニケーションが今年度はあまりできなかった。ZOOMやビデオレターを使って、お互いの知りたがり、知らせたい思いをから、知れた、知ってもらえた喜びを味わう。②言葉だけでなく、相手に気持ちを伝える大切さやその方法を外国語活動だけでなく日常生活で取り組んでいく。	①Google Meetを使用し、オーストラリアリアルタイムでつながり交流を行った。相手と対面することで「伝えたい」気持ちが高まり、積極的なコミュニケーションができた。②外国語だけでなく、生活科や総合などの学習でも、相手に伝えたいという思いから、コミュニケーション能力を高めていく。	B
情報教育	①GIGAスクール導入により、一人一台タブレット端末を用いた共有的な学習スタイルを開拓したり、情報モラルの意識を高めたりする。②プログラミング学習についての研修を校内で行い、各担任が目的や手順を確実に把握したうえで指導に当たることができるようにする。	①分散登校をきっかけに、ロイノートを用いて課題や資料の提示、情報共有、課題提出を行った。情報モラルについては、実態を把握したうえで、必要な学習を計画的に行っていく。②各学年でカリキュラムを基にプログラミング学習に取り組んだ。より各教科との関連性を高めた学習を深めていく必要がある。	B
いじめへの対応	①「子どもの社会的スキル横浜プログラム」を活用し、だれも安心して参加でき、自尊感情を高める授業づくり・集団づくりを進める。②いじめは起こるものだという意識をもち、全職員が「青木小学校いじめ防止基本方針」を基にした指導、対応を日頃から行うことで、いじめの早期発見に努める。	①分散・長期休業明け等にYPを行うことにより友達と関わることの楽しさや自分、相手を知るよさを少しずつ積み重ねていく。優しい心を育てるよう引き続き支援していく。②いじめに対する意識を高くもって対応することで昨年度同様いじめを多く、早期に把握し、対応できた。小さなことから今後も丁寧に対応を続けていく。	A
人材育成・組織運営(働き方改革)	①メンター研でメンティ同士が自律的に運営できる機会を保障し、メンティのニーズに合わせて先輩職員が助言する研修や授業研究会を行う。②働き方改革プロジェクトを立ち上げたり、働き方研修をしたりして、職員自身が自らの働き方を決められる場をつくり、業務改善を積極的に進める。	①メンター長やファシリテーターが中心となってメンティ同士が自律的に運営を行えるようになった。研修や授業研究会では、一人ひとりが発言できる雰囲気となった。②研修を通じた意識改革をはじめ、門当番の見直しや定時運動に取り組んだ。今後も教職員の意見を反映していきたい。よりよい職場づくりを心がけていきたい。	A
ブロック内評価後の気付き	今年度も昨年度に続き感染症予防のため、集合する会議や授業参観、児童生徒の交流ができなかった。しかし、中学校の生徒会が小学6年生に向けた中学校を紹介する動画を作成し、6年生の児童が視聴することができた。動画を通して、中学校のイメージをもつ機会がつかれ、中学生になる自分の見通しやこれから始まる中学校生活へ期待と希望をもつことができた。また、集合開催することができなかったが、担当者同士で集まり、各校の現状や児童生徒の情報交換、今後の見直しについて話し合うことができ、各校で共有することができた。		
学校関係者評価	GIGAスクール導入により、一人一台タブレット端末を用いた共有的な学習スタイルができるようになったのは、大きい。しかし、家にタブレットを持ち帰ると、遊び道具になっている心配もある。基本的に子どもたちに使用できるアプリには規制がかかっているが、規制がかからないものもある。情報モラルについては、今後指導の課題となってくるだろう。タブレットの導入や感染症によって、人と人との関係が希薄になりがちである。しかし、総括すると3年前に比べ、今年度の方がよくなっている。よかったという意見をいただいた。		

中期取組目標振り返り	毎月学年で「情報交換用紙」を作成し、いじめ、集団不응、不登校、虐待などを共有した。また、「いじめアンケート」も2か月に一回行った。教師も子どももいじめに対する意識が高まった。毎月いじめ防止対策委員会を行い、学校全体でもいじめについて認識し、対応した。今年度より始めたたてわり教室配置が定着し、学年を越えて休み時間と一緒に過ごしたり、日常的に会話したりする姿が当たり前のように見られた。「やさしい心」の育成を目指すために、教職員の意識を高めるだけでなく、廊下の歩き方や挨拶、さらに清掃活動などは、地域や保護者も連携しながら取り組んでいきたい。
------------	--

中期取組目標振り返り	コロナ禍でたてわり活動は例年のようにはできなかったが、たてわり教室配置を生かしたフロア研を行い、異学年の担任と協力しながら指導に当たったり、日常的に子どもたち同士で異学年交流を行ったり、「やさしい心」で行動する意識を継続した。いじめなどの情報共有に加え、今年度から個別級が「知的・情緒」級を分けたり、取り出し教育を行ったことで、より一人一人に合った支援ができ、自己肯定感が高まってきている。廊下の歩き方や挨拶などにはまだ課題が残る。学校のきまりを徹底し、他者を思う気持ちにつながることをして来年度の指導につなげていきたい。
------------	---

中期取組目標振り返り	働き方改革研修を計画的に行い、退勤時間の変化も見られ、職員の意識改革につながった。メンティ同士の研修や授業研究会でも、よい雰囲気で行われ、職員自身がよりよい職場づくりを心がけることができた。コロナ禍でもできる範囲で、たてわり教室配置を生かしたたてわりの交流が取られ、「やさしい心」の育成に努めた。また、今年度からGIGAスクール導入により、タブレット端末を用いた学習スタイルを開拓した。分散登校や学級閉鎖などでも活用できていた。しかし、情報モラルの徹底や廊下の歩き方や挨拶についての課題は大きい。来年度は、児童会活動からも改善できる取り組みを考え、発信できるようにしたい。
------------	--